
黒の勇者と白の英雄

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の勇者と白の英雄

【Zコード】

Z1932BA

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

親友と帰宅している途中の主人公はとある神様の頼みで、自分のいる世界とは違う別の世界に行く事になり……。あまり無いと思う勇者と英雄のダブル出演です。こちらは投稿速度は遅いでしょうが勘弁して下さい。

ありがちな第〇話

「勇者様と英雄様に敬礼！」

俺の目の前にいた大体五十人ぐらいの兵士達が一斉に敬礼してきました。もちろん勇者ってのは俺の事だ。つていつか英雄って様付けじや無くね？

ちなみに俺は輝宮黒谷。てるみや くろや英雄ってのは昔の俺の親友、白坂昭道しらさか あきみちだ。俺は黒髪に黒眼で髪が長いので括つてある。昭道の方は黒髪になぜか紅眼。髪は短めだ。

「なあ、どうしてこんな事になったんだっけ？」

「それはずいぶんと前の事を思い出さなくちゃいけなくなるが、いいのか？」

「構わないから説明してくれ。ぶっちゃけ俺は来たばっかりだから、この世界の事とかよく分からんし」

「世界の事は後でゆっくり教えてくれる人がいるけどな。とりあえず、御苦労さま。下がってくれていよいよ」

「「ハツ！」」

兵士達が皆下がった後、俺達は喋りながら進み始めた。さて語るにじょうつか。俺がこの世界に来てから今日までの出来事を。

あらがちな第〇話（後書き）

一作目とさせていただきます。面白ければよこのですが。

第1話・そして少年は告げられる（一）

俺は昭道と学校に帰る途中だった。俺達は高校一年で学校にも慣れて、面白くも無い学校生活を送っていた。

「クロ？ 訊いてんのか？」

「ああ悪い。それで何だつて？」

「だからさ、今日の数学のそ……」

さつきから訊かされているのは、おもに昭道の愚痴だった。成績が良くないから、昭道は大体テスト前に俺に頼つてくる。俺は授業だけでしつかりカバーできるので、自学実習とかほざく大人は黙れと思つてゐるほどだ。

『そこ』の君、ちょっと良いかな？』

「何か用か？ 神様」

俺の視線の先にいるのは、金髪の外人さん。これだけならまだありえない事じやない。でも神様はさつきから空中を浮いているんだ。会つて喋るようになつて以来、俺はこの人を神様と呼びこの人は。

『まあまあ、良いじやないか。勇者の卵君は忙しい訳じやないでしょ？』

「そりゃそうだけど。でも、それとこれとは

関係がない。と言おうとしたがその言葉を言つ前に、神様に言わてしまつたのだ。何をかつて？もちろん、異世界移住宣告をさ。

『日常が楽しくないと思つてゐる。そんな君には異世界への片道切符を上げるけど、どうする?』

第2話・そして少年は告げられる（2）

何言つてんだ？この人は、異世界への片道切符？そういう場合は大抵言われる奴が勇者とか英雄やらになつちまうだろ？

あれ、でもこの人俺を『勇者の卵』って呼ぶよな？つて事は何？俺は勇者でしたつてオチか？

「別にどつちでもいい」

「お？ 言つねえ。話をとりあえず訊いてくれるかな？ そこの『英雄の卵』君と一緒に、わ」

俺が昭道の方を向くと、なんか瞬きしながらじつちを見ていた。あれ？ 神様の事見えてるのか？

俺が初めて会ったとき、他の人には見えないから。とか言ってたのに。しかもなんだつて？『英雄の卵』？ もう完全に意味分からなくなってきた。

「私はここ以外に、もう一つ世界を担当してるんだけどさ。そこに別の神が『魔王』を生み出しちゃったのよ。それで、私のお気に入りの子にお願いされちゃったのよ。『助けて下さい』ってさ」

「そんなんもん自分の世界でどうにかすりやいいだろ？ 何か特別な力を持つ奴に、それこそ勇者の装備的な物を用意してやれば。俺が出張る必要無いだろ？」

「それが出来たらこんな事は頼まないよ。私のお気に入りの子以外、極めて強い特別な力を持つ子がいないのよ。その点君はバツチリよ。特別な力を持つてる。

大体君は本当はこの世界で言つ『魔王』だったのよ？ でも、君の隣にいる『英雄の卵』君が友達になつた事で、その運命は変わり君は

『勇者の卵』になつたの

「それは本当だつたら俺は、昭道いやアキと鬭う事になつてたつて事か？」

「そうだね。それで、どうする？向こうの世界では君を必要としている人がいるんだけど」

「それなら仕方ないか。行くよ。俺しかいないんだつたらな」

「あの、神様。俺はまだ駄目なんですか？」

「君はまだ駄目。こっちの彼の方が早くに修業を始めてたから、完成度としてはこっちの方が高いのよ」

「そう、ですか」

アキは寂しそうな顔を浮かべつつも、次の瞬間には笑顔で振りむいた。

「頑張れよ。もしかしたら、俺もそっちに行くかもしれないからそれまで頑張れよ。クロ」

「当たり前だろ？お前こそ勉強なんとかしろよ？」

「それ言つなよ。それでお前、彩香には言つていいくのか？」

「その必要はないだろ？どうせ俺に関する記憶とかは消すんだろう？」

「まあね。君の情報が残つてると、この世界に歪が生じるしね。でも『英雄の卵』君からは奪わないよ。サービスだよ」

「それでいつ迎えに？」

「今夜零時に君の家の玄関先で。荷物とかまとめてきなよ

「そうする。お前はどうする？」

「もちろん見送りに行くよ。だから、頑張れよ」

「はいはい。それじゃ、とつとと家に帰るとしようかね」

「そうだな。それじゃあ神様、また後で」

「うん。バイバイ。頼んだよ?『勇者』君

そう俺に告げると、神様はスゥー、と姿を消してしまった。俺は家に帰るとアキに協力してもらいつつ荷物をまとめ始めた。

第3話・そして少年は旅立つ

「これで終わひとつ。それじゃあ、ほい。この世界で最後の俺の料理だ」

「おお、『そうだな』。しかしあ前の料理をこの世界で食うのもこれが最後、か。なんだか感慨深いよな」

「そうだな。お前があの時声をかけてくれなきや、今の俺は無かつたけどな」

「声をかけたらとんでもない喧嘩になつたじゃねえか。あれ、結構いたかつたんだぜ?」

「仕方ないだろ?あの状況でみんな軽い声をかけられなんかしたら、さ。それよりもとつとと食え。温かい内が上手い料理しかないんだぞ?冷めたら本来の旨みが無くなる」

「お、それもそうだな。早いとこ食わないと」

「それじゃあ、私も」と相伴にあづからうかな

「……いきなり登場するのは止めてくれませんか?神様」

「ま、良じじやん。ほり、早く食べようよ」

それから俺達は、喋りながら食事をつづけた。零時まではめちゃくちゃ速かった。それから俺は荷物をしまう作業に入つた。

「『』の荷物を汝の中へ『黒影』」

俺の足元の影が伸びて、俺の前にあつた荷物を全て呑みこんだ。呑みこんだとはいっても別空間に収納してるだけなんだけど。

「あ、君を送る世界はスキル制になつてるから

「スキル制？それってあれか？剣術〇〇レベル、とかそんな感じか？」

「そりそり。君は魔術のスキルがマックスの100になってるから、魔術想像のアビリティ^{アビリティ}能力がつくよ」

「そりゃあ、ありがたいね。でも普段通り、俺の黒の力と名前でのみ発動するんだろ？」

「ええっとね、もう出来る術だつたら無詠唱でもできるよ。でも、新しい術は無理だから」

「了解。それじゃあ、行くとしようか」

「そうだね。準備は万端みたいだし、玄関の外に出て。もう出来上がってるから」

「わかりました。アキ、無いとは思つけどもし彩香が俺の事を覚えていたら、この手紙を渡してくれないか？」

「……わかった。でも、無いと思つぜ？」

「それでも、だよ。一種の希望だから」

「そうかい。確かに預かつた」

「……ありがと。それじゃ、じゃあな」

俺達が表に出ると、魔法陣が光り輝いていた。この光も他の人は見えない。見えるのは特殊な力を持つ者だけらしい。

「何？この光は……一体何なの？」

「彩香……。どうしてこの光が見えるんだ？いや、そんな事はどうでもいいか」

「ちょっと、どうこう事よ！？クロー！」

「後の説明はアキに任せた。じゃあ、さよならだ。バイバイ、彩香。

我が翼、異なりし世界を飛ぶ力を与えよ。『黒翼』

俺の背中から黒い翼が生えた。鳥のような常闇の色。でも、綺麗な色。それを羽ばたかせ空中に浮いていた陣に向かつて飛翔した。そして俺は、生まれてから16年間育った世界を捨て、別の世界に飛び去った。

第4話・異世界に到着

俺が魔法陣を通り抜けた先にいたのは、青い髪に紅色といつぱり世界にも幻想的な姿をした人だつた。しかも格好が巫女服。

あれ? こいつて異世界の巫女だよねと思つたが、後ろの集団を見るにやつぱりそうだと思いなおした。だって武装した兵士の人があつて沢山いるんだから。

「あの」

「あ、はい。なんでしょつか?」

「あなたが神様が送つて下さつた勇者様ですか?」

「ええ、一応は。ところで、俺がここに召喚された理由が『魔王』の出現とか訊いたんですけど」

「はい、そうです。それがどうかしましたか?」

「あそこには、言つていた魔物の類ですか?」

「え?」

俺と巫女さんの視線の先には、大量のいわゆるゴブリンと言つての名前のモンスターがいた。うわ、リアルだとあんな感じなんだ。
気持ち悪。

「そんなこんな所まで……」

「ちょっと失礼! 我が身を守れ! 『黒壁』!」

俺の目の前に黒い壁が表れて、跳んできた流れ矢の一本を防いだ。さつきの武装した兵士の皆さんはすでに戦闘を開始していた。

俺も行こうとすると、さつきの巫女さんが俺の袖を引っ張つて止めた。

「何ですか？」

「勇者様が行かなくても大丈夫です。ですから早く私たちは城に戻りましょう」

「何言つてるんですか？俺は確かに『魔王』を倒すために呼ばれたかもしねえ」

「だけど、その前に助けられる人を助けなきゃ始まらないでしょう…」

「で、ですが」

「でも何もない！あなたの身は守ります。ですけれど、あの人は達も今の俺には守らなきやいけない人なんです！」

俺は巫女さんに結界を張った後、走り出した。しつかし、ついたらいきなり戦闘とか運ねえな。

俺はゴブリンが落としている石でできた剣を拾うと術をかけた。

「『』の剣に我が力を。『黒化』」

剣を黒い物が纏い、刀身を構築した。これは何かを媒体する事で、俺の思つた物の硬度を作り出す事が出来る。今の硬度は鋼、つまり剣と同じだ。

それで近くにいるゴブリン共を薙ぎ払つた。すると簡単に倒れた。うわ、なんじやこりや。弱過ぎだろ？

今度は『』と矢を拾うと、構えた。もちろん『』には術をかけ始める。

「おい、兵士の皆ー早くここまで撤退しろ！そいつら全員まとめて吹き飛ばす！」

「わ、わかった。退却、退却！閃光魔術用意！」

ローブを被つた魔術師風味の人たちが一気に閃光魔術でゴブリンの眼をつぶしていた。これはやりやすいな。

「我が敵を射抜く力となり、その全てを吹き飛ばせー!『黒爆破』ー。」

矢が当たった中心点から、黒い色のとんでもない爆発が広がりゴブリンを一気に焼き尽くした。それで俺の初陣は終わった。はあ、雑魚すぎるだろつ。

第5話・城に向かつて

俺は歩いてさつきの巫女さんがいる場所に向かつた。俺が結界を解除すると、驚いた事に凛とした表情で立っていた。しかし姿勢が良いな。

「あの、巫女さん？」

「はい？ ああ、もう終わつたんですか？」

「いえ、そりゃまあ、終わりましたけど。しつかしやたらと落ち着いてましたね」

「勇者様を信じていましたから。勇者様こそ、大丈夫ですか？」

「え？ ああ、全然問題ありませんよ。ところでお名前をお伺いしても良いですか？」

「これは申し訳ありません。私は、このヴァルフェイル王国第3皇女アリシア・ヴァルフェイルです。以後お見知り置きを」

うん、なんとなくそんな空気はしてたけど、とんでもないビックネームだった。あれ？ 髪に汚れが付いてるな。

「姫様、ちょっと失礼」

「え？」

俺はなぜか懐に入つていた櫛で少しだけだが、髪の毛を梳いた。すると姫様の頬がほんのり紅く染まつた。あれ？ なんかおかしいかな？

「姫様？ どうかしましたか？」

「い、いえ。男の方に髪を梳いてもらつたのが初めてだつたので」

「それは失礼しました。ところで城に向かうとか言つていませんで
したか？」

「あ、そうでした！ベルフエンナイトローダー騎士団長！」

「ああ、もうお話は終わつたんですか？」

「至急馬車の用意をして下さい。勇者様召喚が成功した事をお父様
に知らせに行きます」

「準備はできていますよ。はじめまして、勇者殿。俺はアグルス・
ベルフエン。第3師団を任せてる騎士団長だ。今後ともよろしく
頼む」

「いらっしゃ。俺は輝宮黒谷だ」

「テルミヤ・クロヤ？テルミヤが名前なのか？」

「そういう言い方なら、クロヤ・テルミヤだ。よろしく、ベルフエ
ン騎士団長」

俺は握手をすると、馬車に乗り込んだ。つていうか、この馬車広
つ！一体何人乗りだよ？それともあれか、王族つてのはこんなでか
い馬車に乗るのが普通なのか？

でも一人しかいないから、スペース余りまくりだな。つていうか
このお見合いみたいな感じ、嫌だな。ホントに姫様つて美人だよな。

「それでは、この世界の事を説明させていただきます」

おつと、これは眞面目に訊かないと拙いな。俺は居住まいを正し
て、姫様と真正面で向き合つた。

「……」

あれ～？おかしいな。さっきから真面目な顔で訊いてるんだが、姫様が一向に喋らうとしないんだけど。すると耳の辺りが真っ赤になつていた。うん…どうしてんだ？

「あの、お姫様？」

「は、はい！な、なんでしょうか？」

「いえ、それはこっちのセリフなんですが。さっきからずっと黙つてるからどうしたのかなと思つただけです」「えーと」

「ちよつと、失礼しますよ」

俺は前髪を捲り上げると、俺の額を当てた。うーん、熱は無いみたいだけど……。

「もういいです。熱じゃないみたいだし、なんなんだ？？」

「あ、あのですね。単純に綺麗だなと思つただけです」

「綺麗？何がですか？」

「あなたの黒い瞳が、です。意志の強い感じもして、ちよつと見惚れてしまつて」

「あ、そうでしたか。良かつた、熱とかじや無かつたみたいで」

「心配をかけてしまい申し訳ありません」

それでは取り敢えず、我が国について説明させていただきます。我が家ヴァルフェイル王国は、世界で唯一勇者召喚の成功例を持つ国な

のです」

「それは昔に俺以外にも勇者がいた、といつて事ですか？」

「ええ、そうなります。そしてこの後の段どりになりますが」

「え？ 説明はもう終わりですか？」

早つ一国の名前と勇者召喚をした事があるつて点以外はもうなんでもいいんですか！？」

「後の事はもつと詳しい者がおりますので、実の事を言つと、私も詳しく述べ知らないんです。私は神職を主としておりますから」「はあ、なるほど？」

「それでこの後ですが、城に到着し正装に着替えてもらつた後王に面会していただきます」

「わかりました。それで挨拶したうすぐに出発するんですか？」

「いえ、それは勇者様の『自由に遊び』」

「はい？ そんな事言つたら、俺は国から動きませんよ。」

「それでも構いません。皆の考えはこの国が繁栄する事ですから。でも、願えるのなら」

「願えるのなら？ なんですか？」

「この世界に生きる皆を救つて頂きたいと、やつ思っています」

「このお姫様はなんだかんだで民の事を考えてるんだ。いい姫様じゃないの。俺達はその後一言も発せずに馬車でドアドアと揺られて、城に向かつて進んでいった。

第7話・謁見への道

「それで、この格好で謁見ですか？」

城に入つて、俺は姫様の『正装』に着替えた。紅と金色で刺繡されたド派手な服だった。正直にいえば、俺の趣味ではない。姫様は何が嬉しいのか、一瞬ながら俺の事を見ていた。

「はい。それとこれからは私が、貴方の専任とやらせていただきます」「専任？何をするんですか？」
「これから私はあなたと行動を共にするという事です」「……いいんですか？それ。姫さまにだつて婚約者みたいなのが、いるんじゃないんですか？」

「ぶつちやけ、このマントとか邪魔だよな。話はぼぼ流してくるけど、何か問題でも？」

「いません。私は神に仕える者ですから。それでは着替えも終わつたよつですし、王の私室まで案内します」

俺は姫様に連れられて、王様の部屋まで歩き始めた。この実験動物を観察するような、視線はどうにかならないのか？

「おや、これはアリシア皇女殿下。そちらの方が勇者殿、ですか？」

「ここにちは、ゼクエリア公爵様。そうですよ。これからお父様のお部屋まで謁見に参ります。ですので、そこをじいて頂いても宜しいですか？」

いや、こんなプライドの塊のような人間が道を譲る訳がない。むしろ、貴方がそこをどいては？ぐらい言うと思うが。そんな俺の期待をこの公爵殿？は裏切らなかつた。

「何故私が、このような子供に道を譲らなければならないのですか？その子供がどけば良いだけでしょうか？」

「ははははっ…」いつの予想通りの返答するなよ…」

俺がたまらずに大笑いをすると、公爵の顔が真っ赤になつた。羞恥の余り、かな？しつかし、あぐどい貴族つてなりしてんな。面白過ぎる。

「貴様！我がゼクエリア家を侮辱するか！？」

「あなたのご高名な家を馬鹿にしている訳じゃありません。ただあなたを馬鹿にしてるだけです」

「！」

「その辺にされてはいかがですか？公爵様」

「ランスロットー…」これを黙つていろと言つのか！？

「あなたに王の客人を害する権利があるのですか？と言つが邪魔なのでどいで下さい。対面も出来やしない」

公爵は黙つて道をどき、俺を蔑むような眼で見た後俺と姫様の横を通り過ぎて行つた。そして廊下には俺と姫様と、さつき助けてもらつた金髪のイケメンが立つてゐるだけだつた。

「初めてまして、勇者殿。俺は円卓の騎士団のトップ、ランスロットだ」

なんと伝説の人の名前を持つた人とのご対面だった。おおう、円卓の騎士団ってビックナーメすぎるだろ？

第8話・王との面会

「こんにちわ、ランスロット。お父様からの使いですか？」

「いえ、ちょっと違いますけどね」

「初めてまして、ランスロット殿。俺はクロヤ・テルミヤです。今後ともよろしくお願ひします」

一応礼を逸してはいけないだろうと思つて、自己紹介をした。しかしこの人、強いな。俺が神様と初めて本氣で相対した時の強さがある。

しかもあれで強さを抑えてるって言つんだから、本当に一步間違えば化物だぜ、あの人は。っていうか、神だったな。

「ふうん、なるほど。勇者を任されるだけある、って訳だね。いつか君と本気で戦つて見たい物だ」

そう告げると、通り過ぎて行った。肩に当たられた手の感触がいまだに残っている。なんて威圧感だよ。そう思いながら前を向くと、目をキラキラさせた姫様の顔があつた。

「……どうしたんですか？」

「ランスロットに本気で戦つて見たいなんて言われるなんて、やっぱり凄いんですね！ 勇者様は！」

「その勇者様つていうのやめて。俺の事はクロとでも呼んで下さい！」

「それならクロも私の事はアリシアって呼んで下さい！」

「分かったよ、アリシア。ほら早く王様の部屋まで連れて行ってよ

「あ、そうですね。こちらです」

俺はアリシア先導の元、廊下を十分ほど歩き一室の前に着いた。

部屋の中を探つてみると、一人しか気配が無かつた。

アリシアが扉を開くと、圧倒的な威圧感が俺に向かって押し寄せてきた。一瞬黒の力で剣を作り出しそうになるぐらいだった。

「お父様、失礼します。」こちらが神より授けられし我らが勇者様です

「初めまして、クロヤ・テルミヤと申します。あなたがこの国の王、ですか？」

返ってきた声はあるで少年のような声だった。つていうかこの声はもう少年だろ！その姿は俺と同じくらいの身長で、子供のような外見だがその身に纏う氣はとんでもないといつちぐはぐな人だった。

「初めまして、いかにも俺がこの国の王ガレルザ・ヴァルフェイルだ。よろしく頼むぞ、勇者殿」

第9話・王の試練

「えーと、初めまして。クロヤ・テルミヤと申します。よろしくお願いします」

「お? あんまり驚かないんだね」

「いえ、そりや王様の若さにも驚いていますけど。一番驚いているのはその濃密な霸氣ですよ」

「これがちゃんと分かるのか。そりや安心したよ。今代の勇者は君なんだな。若いな」

「いえ、王様には一番言われたくないんですけど……。匕首が何歳なんですか?」

「俺か? 俺は今年でやつと五百歳つてところかな。建国当時から生きてるけど、結構経つたもんだな」

「五百歳! ?」

「」のナリでーーー! 見ても十代にしか見えないんだけどーーー! や、五百歳ともなればこの霸氣の濃密をも納得だけれどもーーー!

「さて、それじゃ試験とこいつか『黄剣』」

「え? ぐつー! 」

ヒュンツーデガンツー!

いきなり黄金の剣を精製し、俺に向かってとんでも無い速度で振ってきた。俺は感覚でそれを察知し腕と背中に『黒化』をかけた。腕で斬撃を何とか防いだが、そのとてつもない衝撃に吹き飛ばされた。防御は間に合つたはずなのに、扉を突き抜け廊下の柱に激突してやつと止まつた。なんて鋭い剣と速さだよ。

「ほつ、防いだか。なるほど、今回のはそこそこ期待してもよさそうだな。しかし黒、か」

「勇者の前は魔王の可能性を持った者だつたんでね。俺は聖と魔、両方の力を持つてるんですよ」

「なるほどな。だが、その強さ、その若さだと異常ともいえるな」

「一応竜程度なら倒せるぐらいに修業積ませれたんでね。『黒剣』」

ガンツ！バチバチッ！

俺の黒い剣と王様の黄金の剣がぶつかり合ってスパークを起こしていた。この人はとんでもなくムカつく！いきなり試験だとか言って攻撃してきやがって、ふざけんなよ！さらに俺は剣をぶつけまくった。王様もそれに対抗してくる。その堂々巡りだった。

「あんたは昔に召喚された勇者だつたんだろうけどな！いきなり攻撃してくんじやねえよ！」

「そのどんな者にも屈服しない眼。さらに氣に入つたな。だが甘い」「だつたらどうするんです？その身の内の中にある聖剣でも取り出しますか？」

「気づいていたのか。『観察眼』のスキルだな？しかも結構高位の。そんな野暮な事はない」

気づいたら弾き飛ばされて、鳩尾に拳を埋められていた。その衝撃で『黒剣』も解けて消えた。そこに残つたのは細長い棒だけだつた。何かを媒介にしなきや俺は力を行使する事が出来ないからだ。

それでも俺は、王様をにらんだ。こんなのが王様？それならこんな国は滅んじまったくほうが良いんじゃねえの？

「いや、すまんな。本当は一撃でよかつたんだが、楽しくなつてしまつた」

「全くお父様つたら。クロ、大丈夫ですか？」

そう言いながらアリシアは俺の負傷を治療してくれた。だんだん傷が癒えてゆき、何とか動けるレベルまで回復した。しかしながら威力の拳だよ。

「それじゃ、君にはこれからこの国で色々とやつてもらわんといけない事があるが。取り敢えずはギルドで身分証明書を作つてきな」「ギルド？身分証明書？」

「この国では、この国で暮らすために何かしらのギルドに入らないといけないんですよ。そこで身分証明書を作るんです」「なるほど。それを作つてこいと。わかりましたよ。今から行つてきます」

「もう行くのか。それじゃあ、夜は君の歓迎パーティーをするから早く帰つてくるんだぞ」

「はいはい。それじゃ失礼しま、す！」

俺は思いつきり扉を閉めると、取り敢えず服を着替えに部屋に戻つた。

第10話・ギルド登録

「昔のヨーロッパの平民みたいな格好だな。ま、俺は鎧も剣もいら
ないからいいんだけど」

「どうかしましたか？」

アリシアも動きやすい服装に着替えてきた。それでも貴族のお嬢
様風味が漂ってるんだが。

この国のギルドはどうやら結構多種にわたるらしい。農民は農民
ギルド。商人は商人ギルド。冒険者は冒険者ギルドと言つた感じで。
どうやら貴族専用のギルドもあるらしい。

これはとんでもない驚きだ。貴族までギルドに入つているだなん
て。と言う事はあの豚みたいな、公爵? だつたか。あれもギルドに
入つてるんだ。城から歩く事二、三十分ほどで冒険者ギルドに着い
た。

「ここのが冒険者ギルド、か。結構綺麗なんだな」

「そりやあ、依頼も受けるんですから。汚い所は嫌でしょう?」

「それもそうだな。それじゃ入るとしようかな」

「いらっしゃいませ。本日のご用件はなんでしょうか?」

俺達がギルドに入ると、いきなり入口の所に立つていた女人に
話しかけられた。

「えーと、登録に来たんですけど」

「かしこまりました。それではこの紙に必要事項を記入して下さい」

「……アリシア、お願ひ。俺はこの世界の字をまだ書けないんだ」

「はいはい。それじゃあ、私の方で代筆しますから必要事項を教え

て下さいね

俺はそこからアリシアに訊かれた事に答えた。と言つても名前と年齢、性別と住所だけだったが。

受付嬢は紙に書かれた事に驚きつつも、それをざつと読みとり一枚のカードを出した。

「受領しました。それではこの四角の部分に指を押し当てて下さい」
俺が指を押し当てる、名刺のような紙が光り始めてそこにどんな文字が記載され始めた。完全に記載された物を受付嬢が見ると、驚愕といつ顔だった。

「ゆ、勇者？　あ、あなたが？」
「しー。静かに。取り敢えず受け取つても良いですか？」
「あ、はい。どうぞ」
「えーと、なになに？」

お、どうやら俺には日本語として解釈できるようになつてゐみたいだな。それで内容は、と。

名前クロヤ・テルミヤ　年齢16歳　性別　男
ギルドランク　F
スキルレベル　剣術83　魔術100　拳闘術74　弓術87　銃術61　観察眼89
特殊スキル『魔術作成』・『過去視』会得
称号　勇者　異世界からの来訪者　神に認められた者　元『魔王』の卵　聖魔使い　黒使い

「とんでもないな。我ながらそう思つわ

「そうですね。称号がとんでもないですね」

「あなたは一体、何者なんですか？」

「ただの勇者ですよ？ま、発表されるまでこの事は黙つておいて下さいね？」

「あ、はい。……それでは登録をこれで終了します。これから頑張つて下さご」

「ありがとうございます。では失礼」

俺はアリシアを連れてギルドを出て行つた。しつかし俺のスキルレベルつて結構異常なんだな。我ながら驚きだ。

「はあ、あの人ガ勇者、か。格好よかつたなあ」

そんな声が聞こえてきたような気がするんだけど……気のせいかな？

第1-1話・模擬戦（1）

「あ、ようやく帰ってきたんだ。待っていたよ、テルミヤ君」「ランスロットさんじゃないですか。どうかしたんですか？」
「いやいや、訊いたよ？あの王と斬りかかったそうじゃないか。それで君と闘いたいって奴がいてね」

「初めまして勇者殿。私は円卓の騎士所属、ガウェインと申します。以後お見知り置きを」

「はあ、初めまして。クロヤ・テルミヤです。よろしく」「あれ？無視ですか。そうですか。もういいよ」

「闘うのは別に構いませんけど。どうでやるんですか？」

「いらっしゃるです。ついてきてください」

俺達はガウェインさんとランスロットさんの後について行つた。しかしこの一人もあの王様と同等とは言えないけど、濃密な霸気を纏つてるな。

ガウェインさんは濃い蒼色でランスロットさんは濃い黄色だ。密度としては、ランスロットさんが上みたいだけど。

俺達が最終的についた場所は、広い決闘場のような場所だった。しかも観客席にはたくさんの人人がいるし、これは見世物か？

「大変長らくお待まらせしました。紳士淑女の皆様。これより勇者クロヤ・テルミヤ対円卓の騎士ガウェインの模擬戦を始めたいと思います！」

「」のランスロットさんの言葉の結果、観客が沸いた。とてつもない歓声まで上がつてゐるし。

「さてそれじゃあ、始めるตしようか。剣を用意しよつ
「俺は別にいりませんよ。これさえあれば」

俺は長い棒のよつな物を見せると、『黒剣』を発動させ剣の形にした。硬度はダイヤモンド級。ガウエインさんはどこにでもある剣を取り出した。だけどその剣が纏う気配は、聖剣にも後れを取らないだろつ。

「両者準備は良じようだな。それでは試合開始!」

声と同時に、或いはそれよりも早く俺達は打ち合つた。俺はガウエインさんに対してこう思った。

『この男は強い、と』

そして俺達は数合ほど打ち合いを続けた。俺は力を込めてガウエインさんを吹き飛ばし、『黒剣』を解いた。

「どうじつもりだ? 私を侮辱しているのか?」

「いえ、むしろ敬意を称していますよ、ですからこの技を見せるんです。」

闇を知り、だが闇を祓う剣よ。我が下へ来たれ! 聖魔剣『黒天』」

俺の持っていた長い棒から魔と聖の属性の波動が同時に流れ始め、それらが混じりあいそこには新しい剣が出来上がつていた。

「聖魔剣……だと? 聖と魔は交わるなどあり得ない筈だ!」
「俺がその実例ですけどね。さて、それでは続きを始めるとしましょつか」

俺は剣を構えなおした。ガフエインさんも再度剣を構えた。だけ

ど俺の顔は余裕に満ち溢れ、ガウヒンさんの顔は苦渋にあふれていた。

第12話・模擬戦（2）

それからはさらに苛烈さが増したと言つても過言ぢやないだろう。

俺の売りはあくまで魔術であつて剣技ぢやないのだから。

大量に剣を生成し、飛ばす。これだけでどんどん地面が針山のようになつてゐる。それにプラスして俺の剣技まで襲つてくるんだから、相手としてはたまつた物ぢやないだらう。

「いやあ、流石ですね。こんだけやってまだ倒れないとかどんだけですか」

「はあ、はあ。……あなたこそよくそれだけやって、魔力が持ちますね」

「俺の魔力総量は異常だつて神様に言われるぐらいですから。さてそろそろ終わりにさせてもらいますよ」

「私はまだ行けます！」

「俺が終わらせるだけですよ。さあ、全ての剣よ。今我が下に還り来たれ」

俺が飛ばしまくつた剣、総数六百三十五本の剣が俺の周りに集まり俺を囲んだ。

「王と共にありし剣^{じゅ}が碎けた時、汝はその姿を現す。顯現せよ。『^{コールブランド}
聖皇剣！』

俺の周りに浮かんでいた剣達が一斉に碎け散つた。そしてその身に内包していた波動を俺が持つてゐる一本に集約させた。

総ての波動を取り込んだとき、聖魔剣は新たな領域に進化した。

そう、あらゆる聖剣の王、聖皇剣へと。

はつきり言えば莊厳の一言に尽きる。どんな聖剣もこのよつたな波

動を放つ事は出来ないだろう。

「聖皇剣……だと？」

「真なる聖剣＜エクスカリバー＞には劣りますが、それでもほとんどの聖剣を凌駕した力ですよ」

「確かに。その波動はとてつもない。だが！ 我が剣＜ガラチン＞も劣りはしない！」

「これだと俺が反則みたいな物だから、貴方にはこのハンデを差し上げます。

汝は剣の華。さあ、今この場所に大輪を咲かせよ！ ＜剣世界＞！」

これが俺が唯一使える固有結界。 ＜剣世界＞だ。久しぶりに使つたけど、これは結構力を消費するんだよな。

その能力は簡単だ。この場に何百何千という剣を出現させる事。しかも自分が考えた通りの形状、そして概念を纏わせる。でも、この剣の前には無意味だ。

「剣だけだな。取つても構わないか？」

「どうぞどうぞ。これらには全て使用者が望む形状を取り、概念を纏わせる事が出来ます」

「それは便利な事だな。だが、私には概念などいらない。この力だけで勝つ！」

それから十分後、結果的にいえ俺が勝つた。なんせ俺が作った固有結界の剣は聖皇剣の前には一撃で砕け散るからだ。

俺達は試合終了後、固い握手をして別れた。観客達には温かい拍手をもらつた。両者をねぎらう様な拍手を。そして俺は部屋に戻り、また正装に着替えさせられる羽目になつた。眠いんだがな。

花火

「いやあ、流石は勇者殿。素晴らしい剣技でしたな」「あのガウエイン殿と対等に渡り合いつとはな」

あれから数時間後、俺はパーティーの会場に来ていた。街の方を見てみると、所々で明かりがついていた。普段はこんな夜中まで起きている人は少ないらしい。

そんな噂をされている俺はどこにいるのか、と言えば俺は屋上にいた。無論、城の屋上に上がる方法など無い。俺が『黒翼』を展開して飛びあがつたんだ。

「はあ、流石は異世界。星がきれいだな

「何してるんだい？ 勇者殿」

「あなたこそどうやってこんな所まで来たんですか？ ランスロットさん」

「君が外に行くのが見えたから、追つたら空中に飛んでいる姿が見えたから僕も登つてきただけ」

「どうやって？ ここ、結構な高さですよ？」

「壁を蹴って。いやあ、こんな無茶ぶつを要求される事になるとは思わなかつたよ」

「あんたが勝手に登つてきただけだろうが。俺が頼んだ訳じゃねえよ。」

「こう言葉はさすがに心に押しとどめた。そして俺は街の方向に視線を変えた。皆の騒ぎ声がここまで聞こえてくる。

「さて、俺も何かしますかね」

「へこんな場所で何をするといつんだい？」

「花火でもあげますよ。俺はちょっと山の方まで行きますけど、なんだつたら一緒に行きますか？」

「行く…！」

その後、俺達は近くの山まで俺は飛んで、ランスロットさんは走つて向かつた。明かりは俺が炎を出していたので大丈夫だった。そして山の頂上にまでたどり着くと、俺は術式を書き始めた。普段使っているのは、俺の黒の力を使つた物で魔術じゃない。つまり、これが俺がこの世界で初めて使う大規模魔術という訳だ。

「全ての者に喜びと笑顔を与えるよ。大輪の花よ、咲き乱れろ！『百花大乱』！」

俺が描き上げた術式から、ヒュンと言う音と共に小さい火種が空中に昇つていきある高度にまで達すると花のように咲いた。術式が出来上がると、俺達は魔術を使って城の人たちと街の人たちの両方に花火の事を伝え、パーティー会場に戻った。その後俺はアリシアに怒られたけど。

「綺麗ですね。クロ」

「そうだな。自分で作ったものだけど、綺麗だな」

俺は花火に夢中になっている顔を見ながら、綾香の事を思い出していた。あいつらは今どうしているかな？

頼み

「勇者殿、ちよつとよろしいですか？」

「え？……すいません。どなたでしょつか？」

俺の目の前に現れたのは、女性と男性が一人。女性は金髪に金色の目だった。男性は蒼い髪に碧の眼と銀色に眼は閉じているのか開けているのか分からぬぐらいため細かつたから分からなかつた。

「申し遅れました。私は隣国のアルヴェスタン帝国所属の聖三騎士の一人〈剣〉^{セイバー}という者です。それでこちらが

「初めまして。〈槍〉^{ランサー}だ」

「……〈弓〉^{アーチャー}」

「はあ、それでどういった御用件でしょうか？」

「ぶつちやけ、面倒くさいような匂いしかしないんだが。この感覚は例えて言うなら、ガウエインさんのような感じかな？」

「我々と闘つて頂きたいのです」

「何故？」

「あなたとガウエイン殿との闘いを見ていたら、武人としての血が騒いでしまいました。お願いできないでしょつか？」

「今日は無理です。明日の昼頃にならなんとか全快しておるでしょうが……三人同時に相手するんですか？ そうなると、俺は剣技だけじゃなく、俺固有の力を使う事になりますよ？」

「構いません。それも覚悟のつゝ、ですから」

「……わかりました。それでは、明日の昼頃に闘技場にて

「ありがとうございます。それでは我々これで失礼します」

三人は一緒に出て行った。どうやら客間に向かっていったようだ。
さて俺は、王様にでも頼むか。

「王、ちょっと頼みがあるんですが」

「うん? どうした勇者殿?」

「武器庫を見せていただきたいんですけど」

「……いいだろ? ついてきたまえ。それでは皆様、我々はこれで失礼させていただきます」

俺は王様先導の元、武器庫に向かつて歩き始めた。俺はこの城にあかるくないしな。だからと言つてアリシアが知つてているとは思えない。

数分歩くと、でかい門の前に俺達は立つていた。そして王様は懐からキーを取り出すと、鍵穴にはめ込み鍵を外した。

そこには大量の剣やら弓や槍などが置いてあった。つていうか全部何かしらの特殊能力があるんだけど……。じつと見てたら目が痛くなること請け合いだ。

俺はしばらく、そこに置いてある武器を見て回つた。そして一本の剣と一本の刀を手に取つた。剣は聖の加護があり効果は絶対に折れない。刀は妖刀で効果は総てを断ち切る、だ。

「……それでいいのか?」

「ええ。俺が使う剣術にこれほど合う物は無いでしょう。一本で防ぎ一本で断ち切る。俺は後の先を習得している訳ではないので」

「そうか。それでそれはいつ使うんだ?」

「明日、セイバーさん達との戦いで。さすがに能力は禁じますけどね」

俺と王様はそこで別れて、俺は自分の部屋に戻つて寝る時用の服に着替えてベッドの中に入った。

初っ端からくそ忙しいかったな。と思いつつ意識をまどろみの中に移した。

セイバーとの闘い（前書き）

お気に入り登録していただいた皆様、ありがとうございます。これからも面白くするために奮闘したいと思いますので、意見などよろしくお願いします。

セイバーとの闘い

「それでは両者、準備は良いかい？」

「俺は構いません」

「私達も大丈夫です」

「それじゃ、試合開始！」

翌日の午後、闘技場は昨日と同じくいやさらに増えたかな？大量の人でにぎわっていた。俺の前には三人がそれぞれ自分の武器を持つていた。

皆それぞれの名前？と同じ武器を持っていた。セイバーさんは剣。ランサーさんは槍。アーチャーさんは弓と。矢は持っていないから魔術を使うのかな？

「初手は私が行かせてもらいます！」

「あなたですか。それなら早速ですけど、これを使わせてもらいつてしましょうか」

俺は剣に聖属性を纏わせて強化した。そしてセイバーさんの剣を何とか全て凌ぎきった。この人なんなの！？ガウエインさんなんかちょっと田じやないレベルだよ！？

「さすがにお強いですね」

「あなたも早く奥の手を見せて下さい。それを見たいが為に私が挑んだのですから」

「仕方ないな。それなら一つ、お見せするとしましょう」

俺は周りに聖剣を大量に生み出した。これだけならまた昨日と同じ事をするのか、と思うだろ？

だけど昨日創った聖剣の数は六百三十五本。
なんと千本だ。

「汝、全ての聖剣を凌駕せし原初にして真の聖剣なり。來たれ、
聖剣！」
スカリバ

創り出した聖剣の全てが碎け、そしてそこに内蔵されていた聖なる波動が剣に集まってきた。

綱でを完全に吸収すると、剣が光り輝き全く違う形は変化した。それはただ存在するだけで強烈な聖なる波動を放ち続けていた。

「まずこれが一つ目。もう一つ目は『れ』ですよ。今我が袂に来たれ
『黒龍ウコトウ』」

俺から黒の力が放出され、そしてそれは段々と形を作っていた。
黒い竜へと。

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！

黒い竜は咆哮を上げた。今の彼らには気づかないことだつたが、この咆哮ははるか遠い魔王領の魔王にも聞こえていた。というか、魔王もこの戦いを見ていた。

さて次は、と。我が身に纏え『黒竜鎧化』

ガリトワはその形を解き、俺に鎧の形でもとわりついた。完成しきつたその鎧は、やつきの竜の姿をそのまま人間の形にした感じだった。

「準備は終わつたけど。さあ、どうする? 『剣』をなん?」
セイバー

セイバーとの闘い（後書き）

はい、また更に主人公のチートぶりが發揮された瞬間でした。それでは本日の投稿はここまで。出来ればまた明日、お会いしましょう。

「それがあなたの奥の手ですか……」

「そうだよ? いやホントはこれよりもひとつ段階下のを使うつもりだつたんだけど、どうも反応しないようだからな。サービスって事でね」

「それは有難いことですが……剣は持たないのですか?」

「こんな剣、今の俺が持つたら粉々に碎けるつちゅーの。ま、拳闘ならぎりぎり俺の筋力だけを使う事が出来るがな」

「それは……ただ鎧を着たのと変わらないのでは?」

「そうだよ? でも一言だけ言つておく

「君が相手取るのは、竜すらも従える者だという事を、忘れるな

俺はさつきから何となく感じている俺を観察する眼と、セイバーさんの両方に告げた。そして俺は前方に向けて一気に魔力を伴った掌底を放つた。

「霸竜・轟牙」

地面がすり鉢状に削られていった。セイバーはこれは迎え撃つ物ではないと一気に判断したらしく、回避した。

無論、そんなことぐらい読めている。俺は下半身だけは竜の筋力を使い、疾走した。あまりにも速過ぎて、分身すらもできていたらしい。

俺はセイバーの顎先に向けて一気にアッパーを放つた。そして空中の結構な高さまで、吹き飛ばして竜の力を使い飛翔した。

そしてそこからは無限にラッシュ! 二十発ぐらい殴った後に、一気に地面に向かって蹴りつけた。すんでの所で、ランサーにキャツ

チされていた。

「これで試合は終了、かな?」

「うん、やつだね。勝者、クロヤ・テルニアー。」

歓声は……さすがに上がらなかつた。ま、当然だなと思いつつ俺はセイバーさんの近くまで歩いた。無論ランサーは警戒していたが。

「その傷を癒し、この者に今一度の力を『ヒール』」

癒しの光に呑まれ、セイバーの傷は全て癒された。もちろん意識は失つたままだが。俺はそれだけを確認すると、闘技場を出ていった。

EX・セイバー視点

「…………？」

確かに私は闘技場にいたはずじゃ……。そう思いながら体を起こすと、そこにはランサーとアーチャーが心配そうな顔をしてこちらを見ていた。

次の瞬間には一人は安心しきったような顔に変わっていた。

「なあ、二人とも。勝負はどうなったんだ？」

「お前の負けだよ。といつかれは勇者殿のズル勝ちだけどな」

「なにがズル勝ちだつて？ランサー」

いきなり扉の向こうから声がしてきて、扉の先には勇者殿とアリシア姫が立っていた。

「こんにちは、勇者殿。それにアリシア姫」

「やあ、セイバー。何とか治つたみたいだね」

「勇者殿は強かつたですね。まさか竜を従えるとは……お見それしました」

「スルーかい！まあいいや。今回お見舞いに来たのは一つ訊きたい事があつたからだよ」

「はい？訊きたい事……ですか？私が答えられる事ならば、どうぞ」

一体何を訊かれるのかと思つていたら、私にとつてとつもない事を訊いてきた。

「君さ、俺のあの状態相対して死ねる、とか考えたでしょ？」

「 「 「 ？」 」

「うう……して？ううしてこの人がそんな事を知っている…？」

「はあ、やつぱりか。それを確認に来たんだよ。俺の観察眼スキルレベル85によつて得た『過去視』で俺は相手の過去と想いを知る事が出来る。といつても、約一か月間だけだが」

「それで……私に何を言いたいんですか？」

「わからない？だから俺は、君をぼこぼこにしたんだよ？自分が特別でそんな自分に勝てる人は少ない。だから、退屈だから死にたいとか思つてたんじよ？」

「それが何か？どんな問題があるというのですか？」

「あまりふざけた事をぬかすなよ、小娘風情が」

「！？」

「口調が一気に変わつたような気がするんだけど……。何か触れてはいけない事に触れてしまつたのだろうか？」

「せいぜい二十年ぐらいしか生きてないんだろう？そんな人間が死にたいとか、喧嘩売つてんのか？」

「い、一体何なのですか！貴方に一体なに？」

「黙つてろよ。あんたはな、この世界に生きる存在で特別な訳じゃない。所詮この世界を構成する一部分にすぎないんだよ。そんな奴が度を超えた事をぬかすんじゃねえよ！」

「……」

勇者殿は黙つている私に失望したのか、舌打ち交じりに部屋を出

て行こうとした。だが、その寸前で足を止めて一いちら振り返った。

「頑張れよ。少なくともあなたはもっと強くなれる。だからもうち
ょっと世界を長い目で見る。俺が言えるのはこんだけだ。じゃあな

そう言い放つて扉を閉めた。だけど、私はその言葉に応える事が
出来なかつた。胸の内に灯つてしまつた小さいながらも、ちゃんと
した炎を理解してしまつた。

そう、私は分かつてしまつたのだ。私はあの人の事が
の人に恋をしてしまつたのだと。

あ

「あればばれてる、かな？」
「どうかされたのですか？魔王様」

ここには魔王領の俺の城、夜帝国(ナイトリオン)にあるグラザナリア城だ。
俺はここで魔王としての任を与えられたグラズ・バルアだ。そこで今話しかけてきたのは、幹部で俺の秘書の『十天星』レグナリウス・ドルナスだ。

「いや、さつきまで昨日感じた強力な波動の場所を調べたら、なんとあのセイバーと勇者の闘いがやつてたんだよ」

「なんと…あの三聖騎士の『剣』ですか？」

「そつ。でも、問題はそこじゃない。なんと今回の勇者は魔物を使役できるらしい」

「それは問題ですか？」

「問題だよ。使役してたのが『黒竜、ヴリトラ』ともなればね

「ヴリトラ殿を……ですか！？」

「そう、あの竜神の一体に数えられるヴリトラ殿だ。八代魔王すらも従える存在だ。それを従えるともなれば……半端じゃないな」

「これは楽しくなりそうだ。こんな時に政務なんかしてられるか！
俺は急いで部屋を飛び出た。

「ちよつと、魔王様！？」

「悪いな、レグ！俺はちよつと勇者殿に会いに行つてくるわ！」

「ええ！？」

そのまま走っていると、ちょうど俺が妹のよつに可愛がっているシャルナが現れた。

「あれ？お兄様、どこか行かれるのですか？」

「ああ、ちょっと人間界まで。お前も付いてくるか？」

「え？いいんですか！？」

「構わねえよ！ついてきな！」

「はい！」

俺達はそのまま走って、中庭に着いた。もちろん途中で旅行に必要な金は集めてきたが。

「来い！優鉢羅、摩那斯！」

俺の前に八大魔王の二体が表れた。そしてそれら一體ずつに乗り込んだ。そして用件を口にした。

「頼む、俺達を人間界まで運んでくれ！」

「いいだろう。ここ最近我らも暇だつたしな」

「その代わり我らも同行しても構わんna？」

「おう、俺はOKだ。旅は多い方が楽しいからな！」

そして俺達の人間界行きの旅は始まった。さて、会えるといいな
？勇者殿？

EX・魔王視点（後書き）

はい、実にフットワークの軽い魔王でした。ちなみに召喚した竜王の名前は、順にうみづら、まなしです。この二体は実在します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932ba/>

黒の勇者と白の英雄

2012年1月14日21時56分発行